

# 図書館だより

NO. 8

2016年12月6日

## ◇11月の学年別貸出冊数

学年	中学1年	中学2年	中学3年	高校1年	高校2年	高校3年
貸出冊数	394冊	480冊	194冊	77冊	95冊	30冊

総貸出冊数 1270冊

## ◎ 12月の開館スケジュール

原則、毎日開館です。閉館日は日曜日、休日（12/4、11、18、23、24、25、12/29～1/3）

※ 但し、授業のない土曜日12/3は午後、12/17は午前中の開館です。

## ◎新着案内

新着図書が70冊入りました。教室掲示の新着図書案内、図書館入口新着図書コーナーでご確認ください。

## 新着図書ピックアップ

### ・「国境のない生き方 私をつくった本と旅」 ヤマザキマリ/著 726-ヤ

決められたルールの中で、まわりと同じことをやって生きるのって案外とラクなのかもしれない。そんな見えない枠の世界に息苦しさを感したら？「自由に生きる」ってどういうことでしょうか？世界は広く、どんな人生を生きるかはあなたの自由であり、頼れるのは自分です。「一步枠の外に出てみたら、素晴らしい世界と頼もしい自分に出会えるよ！」と、著者が自身の体験を通して、あなたを勇気づけてくれる一冊です。

### ・「メ切本」 左右社編集部/編 914.6-シ

はたして作家や編集者にとってのメ切とは？漱石・谷崎ら明治の文豪から現代の流行作家まで、90人によるメ切にまつわるエッセイ・書簡・対談・言い訳など。左右社編集部による今までにない人生のメ切エンターテインメント。読書好きなかたはぜひ一読を。

## 司書からのおすすめ本

### 「聖の青春」 大崎善生/著 796-オ

将棋界の怪童として名を馳せ、名人を目指し最高峰リーグA級での奮闘のさなか29歳という短い人生を閉じた村山聖。本書は、病と闘い続けた天才棋士・村山聖の生涯を克明につづったノンフィクションである。2016年11月19日公開の映画「聖の青春」の原作本。

その他にも「物語ること、いきること」上橋菜穂子/著 『「自分の木」の下で』大江健三郎/著もおすすめ本として展示してあります。ぜひ借りて読んでみてください。

◎ 同コーナーに「羅針盤Ⅱ」-高校生のための本42冊（都立多摩図書館作成ブックリスト）にある本校所蔵本を展示しました。こちらの本もぜひ読んでください。

## お知らせ <<冬休みの特別貸し出しについて>>



12/15（木）～12/28（水）は、10冊まで借りられます。  
返却期限はすべて2017年1/11（水）です。  
なお、高3生に対する貸し出しは原則12/28をもって終了します。  
（最終返却は1/11となります。）  
貸し出しが必要な場合は、対応しますので、司書までご相談ください。



## ☆図書館を活用しましょう 第5回《発展編—ブラウジングという究極の図書館活用》

「人間は歩く情報動物である。」人間は歩く動物であり、見る動物であり、そして考える動物だといえます。そして、これらをその目的意識に照らせば、結局、人間とは情報動物といえることができるのです。

なんとなく図書館のフロアをぶらぶらと歩き回ったり、棚を気の向くままに見てまわったりといった経験がないでしょうか。こうしたことを一部の図書館関係者の中で「ぶらぶらブラウジング」とよんでいます。

いつものように今回も奥野宣之『図書館超活用術』（朝日新聞出版）を参考に活用方法を紹介します。

### Step8 : ○ぶらぶらブラウジング

「ブラウジング」とは、元々はコンピュータ用語ブラウザ(Webブラウザ、GoogleやInternet Explorerが代表的)から派生した言葉のようですが、図書館でブラウジング【browsing】(情報を閲覧すること、拾い読みをすること)とえば、「本棚を漫然と眺めて、気になる本があれば取り出して読む」という行為のことを言います。

こうした行為は、○課題解決型学習や作文を書くとき、「テーマが決まって」関係資料を図書館などで探している場合。○課題解決型学習や作文を書くとき、「テーマが決まらず」テーマのヒントを図書館などで探している場合。◎学習場面とは直結しないが、図書館や書店で行われる(語の意味としては本来の漫然とした)ブラウジングの場合があると思います。

図書館でのブラウジングは、一見するとただの暇つぶしのようにも思えますが、実は思いがけない発見につながったり、物事が進まなくなったり壁に当たったりした時など煮詰まっている物事の解決に役立つ有意義な時間といってもいいでしょう。

歩き回ると様々な情報が目に飛び込んでくる。求めていると自覚している情報だけではなく求めているとは自覚していない情報にも出会うことができる。その結果、視野を広げ、いろいろなことを考えられるのではないのでしょうか。

人間の視覚の不思議さは、意識して読んでいることば以外に無意識にとらえている(眼に入っている)情報(＝言葉)を蓄積していることです。それらが、(もちろん必ずしも保障するものではないですが、)潜在意識化にある自己の興味・関心分野を引き出し、自己の課題の発見につながるといったことがあると思います。

岐阜市立図書館・分館 ビジネス支援担当 里見 幸子さんがネットのコラムに

図書館でのブラウジングとは?の中で「考えがうまく前に進まなくなったり、「何か足りないな」と行き詰ったりしたときは、ヒントになるものを求めて、なんとなく図書館のフロアをぶらぶらと歩き回ったり、棚を気の向くままに見てみること」で打開する場合があるといったことが書かれていました。

また、「図書館内を歩くことで思考を落ち着かせ、本(のタイトル)を目で見て神経に刺激を与え、関連するけれど少し違った視点で問題を見る余裕を与えてくれる」アプローチになるのでは…?とブラウジングを勧めていました。

ネットは効率のだが、みんな似たような情報を得がちなのに対して、書架＝「場」に身をゆだね、身体で情報を得る。その中で潜在的に気になっている情報が目につくのではないのでしょうか。また、本棚を歩き回っているうちに何らかのヒントが得られる可能性があるということは、あいまいなまま研究を始められるということです。

「何も思い浮かばない」「何も感じない」といった取りつく島もないテーマでも、棚を眺めているうちにだんだん「とっかかり」ができてくるものです。大事なものは、考えたいことがあるなら、まずそのテーマに応じた「本棚の前に立つこと」です。資料の中で考えることが自分だけの模索へと繋がっていくのです。

また、発想力や思いもしなかったような着想を得たり、マンネリ化した発想を切り替えられたりすることもあると思います。

さらには、最近の本の背表紙にあるタイトル、開いた目次、はじめになどのキーワードとなることばには、まるでキャッチコピーのようなインパクトのある言葉・表現が多く、言葉のセンスを磨くことにも繋がるのではないのでしょうか。

☆「ぶらぶらブラウジング」こそ、場としての図書館の究極の活用法です。